博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　趙　義成　㊞

学位申請者　金恩恵（キム・ウンヘ）

論　文　名　韓国語と日本語の内外空間名詞の対照研究
—コーパスの用例に基づく連語構成の分析を中心に—

【審査結果】

金恩恵氏より提出された博士学位請求論文「韓国語と日本語の内外空間名詞の対照研究—コーパスの用例に基づく連語構成の分析を中心に—」について，審査委員会は論文を精査し，最終試験を行なった。その結果，審査委員会は本論文が本学大学院の学位授与の基準を十分に満たした優れた論文であると判断し，全員一致で金恩恵氏に博士（学術）を授与することが適当であると判断した。

審査委員会は趙義成を主査とし，本学の南潤珍准教授（主任指導教員），五十嵐孔一教授（副指導教員），学外から生越直樹教授（東京大学），權容璟教授（神田外語大学），あわせて4名の副査をもって構成し，最終試験は2019年2月26日15時よりアゴラ・グローバル3階 プロジェクトスペースにて公開で実施された。

【論文の概要】

本論文は，現代朝鮮語（金恩恵氏が「韓国語」と称するものを，この報告書では「朝鮮語」と称することにする）の空間名詞「an, sok（この2つは「うち，なか」に類する意味の単語），pakk, keth（この2つは「そと，おもて」に類する意味の単語）」と，日本語の空間名詞「うち，なか，そと，おもて」について，コーパス資料を用い，連語構成を中心に語彙間の結合関係，類義・対義関係を軸とする系列関係を通して分析した対照研究である。

論文の構成は「第1章 序論」「第2章 先行研究」「第3章 本研究の基本的な観点」「第4章 韓国語の内外空間名詞「an, sok, pakk, keth」の意味用法」「第5章 日本語の内外空間名詞「うち，なか，そと，おもて」の意味用法」「第6章 韓国語と日本語の内外空間名詞の意味用法の対照」「第7章 韓日内部空間名詞における語彙性と文法性の対照」「第8章 結論」となっている。

第 1 章では本研究の目的と研究対象がまず述べられている。朝鮮語の an と sok，および pakk と keth はそれぞれ意味的に重なる部分があり，同様に日本語の「うち」と「なか」，および「そと」と「おもて」も意味的に重なる部分を持っている。本論文は内外の空間を示すこれらの名詞を「内外空間名詞」と称し，それぞれの言語における語彙的意味を分析し，そののちに朝鮮語と日本語の間で語彙的に対応する「an, sok」と「うち，なか」，「pakk, keth」と「そと，おもて」を対照し，両言語における異同の様相などを分析することを明らかにしている。

第 2 章では朝鮮語と日本語の空間語に関する先行研究に関し，語彙論的意味についての研究，認知言語学的研究，文法的要素への変化についての研究に大別し検討している。ここにおいて，朝鮮語と日本語の空間語研究では時間語化に関する研究が多く，個別語の研究では限定された用例に依拠した研究が多いとし，意味用法に関する包括的，実証的な研究は十分になされていないと指摘した。また，日本語の研究では，個別語の語彙的意味に関する研究が十分でないとし，これらのことから日朝両言語の対照研究には言語資料の構築および語彙的意味の綿密な分析が必要であり，作例でない実証的な用例分析に基づく客観的研究が求められるとし，先行研究に対する本論文の意義を述べている。

第 3 章では意味構造体としての連語（コロケーション），および本研究で用いる動詞分類と名詞分類について述べている。ある語彙の意味は単独の個別の語彙レベルではなく，文の他の成分との結合関係と意味上の係わりの中で，意味構造体のレベルで実現されるという立場を本論文では取っており，そのような立場から本論文では内外空間名詞を連語の中で捉え，いかなる語彙と，どの程度の頻度で，どのような意味を表すかを分析するとしている。したがって，本論文では内外空間名詞と共起する名詞，動詞について分類を行なうことなる。本章では，先行研究における分類等を踏まえて，本論文において名詞と動詞をどのように分類すべきかを論じている。

第 4 章では朝鮮語の内外空間名詞「an, sok, pakk, keth」の意味がどのように実現するかを記述している。分析は，(1) 内外空間名詞がいかなる格形として現れるかを観察，(2) 内外空間名詞に先行する要素の形式的な違いにより類型①（先行名詞を伴うもの），類型②（連体形による連体修飾語を伴うもの），類型③（先行要素を伴わないもの）の 3 つを区分，(3) 内外空間名詞に後行する動詞，という 3 点を基軸して詳細な検討がなされている。この分析において，「an」は具体的空間を，「sok」は抽象的空間を表す場合が多いこと，「an」と「sok」，「pakk」と「keth」は実体的空間を表す場合には意味的な重なりが見られ，抽象的空間を表す場合には意味的な重なりが少ないこと，「an」は可視性，開放性，移動性，拡散性の空間を，「sok」は不可視性，密閉性，密集性，自然現象の空間，継続状況の空間，心理的空間などを表すこと，「pakk」は移動，出現，事態発生の空間，視

覚的・聴覚的な空間，立体的空間を，「keth」は存在，付着，露呈，状態変化の空間，平面的空間を表すと指摘している。また，「an」と「pakk」，「sok」と「keth」はそれぞれ基本義において対義的な関係にあるが，基本義から時間的な意味，抽象的な意味へと移ると対義関係が成立しないと指摘している。

第5章では日本語の「うち，なか，そと，おもて」の意味について記述を行なっている。分析の方法は第4章と同様に，名詞の格形態，先行要素，後行動詞の3点を軸にしている。「うち，なか」については (1)「うち」は非実体性名詞を先行名詞とするものが多く，時間や心理・心情の抽象空間を表し，身体名詞や人間名詞などの実体性名詞と共起する「うち」は心理空間や範囲を表すのに対し，「なか」は立体・平面の具体空間や自然空間などの実体性空間から抽象性空間まで意味の幅が広い，(2) 実体性の高い先行名詞と連語を構成する場合「うち」と「なか」の意味的な重なりは見られないが，心理，感情，範囲の限定といった意味を表す連語構成の場合，両者は意味的な重なりを見せる，(3) 前項の連語が集団や状況の範囲を表し，後項の連語が出現動詞や選択動詞である場合，「うち」は範囲と構成要素が明確な場合には用いられるが，「なか」は選択の範囲がより広く，明確な構成要素の指定がない，(4)「うち」は抽象空間，時間，範囲を，「なか」は具体空間，抽象空間，範囲，状況を表し，両者は心理・心情の抽象空間の意味のときは意味的な重なりを一部で見せるが，共起する後項の連語の排他的分布から意味的な違いを見せると分析した。

第6章では，第4章および第5章においてなされた朝鮮語と日本語の内外空間名詞の分析結果を基にして，「an, sok」と「うち，なか」，「pakk, keth」と「そと，おもて」の意味をそれぞれ対照している。「an, sok」と「うち，なか」については，(1) 「an, sok」は基本義である具体空間，身体空間，観念的な抽象空間の意味領域で重なる部分があるのに対し，「うち，なか」は基本義である具体空間の意味領域では重ならない，(2) 先行名詞が抽象的な心理空間を表す場合，朝鮮語は「sok」と共起し，日本語は「なか」と共起する頻度が高いが，先行名詞が観念的・客観的な意味領域を表す場合は「うち」とも共起する，(3) 具体的あるいは抽象的な状況を表す場合，朝鮮語は「sok」を，日本語は「なか」を用いる，(4) 時間の範囲を表す場合，日本語は主に「うち」を用いるのに対し，朝鮮語は「cung, ttay, cyen, tongan」を用い，両言語の間で対応関係が見られない，(5) 範囲を表す場合，日本語の「うち」と「なか」は朝鮮語の「kauntay, cung」と対応し，意味領域の拡大様相に相違が見られる，といった点を明らかにした。「pakk, keth」と「そと，おもて」については，まず「pakk」の意味領域に関し「具体空間」と「抽象空間」に大別しうるとし，(1) 具体空間を表す「pakk」は「そと」と対応関係を示す，(2) 抽象空間を表す「pakk」は先行名詞により概念的抽象空間，社会的抽象空間，身体的抽象空間に分類され，概念的抽象

空間および社会的抽象空間を表す「pakk」は「そと」との対応関係が認められるが，身体的抽象空間を表す「pakk」は対応関係が認められないとした。また，「keth」の意味領域に関しては平面の具体空間と抽象空間に大別しうるとし，(3) 具体空間を表す「keth」は付着，発生，視覚，触覚，不可視の空間を表し，「おもて」とは意味領域にずれがあり，「keth」と「おもて」が共通して二次元の平面やモノの表面を表す場合，「keth」は通常具体物の表面を表すが，「おもて」は自然の表面の状態を表すことが多く，意味領域のずれが見られる，(4) 抽象空間を表す「keth」は主に感情等を表す心理的抽象空間であるのに対し，「おもて」の連語構成が表す抽象空間は心理的抽象空間および社会的抽象空間であり，心理的抽象空間の場合「keth」と「おもて」は意味領域が重なり対応関係があるが，社会的抽象空間を表す「おもて」は「社会の前面で出る」という肯定的な意味を表し，「keth」とは対応関係を持たない，(5) 具体空間を表す「pakk」は具体空間を表す「そと」「おもて」の意味領域と重なり包括の対応関係を示しつつも，「おもて」が方向や位置を指定する成分と結合する場合は「aph」と対応する，といった点を明らかにした。

第7章では，内部空間名詞である朝鮮語「an, sok」と日本語「うち，なか」について，その意味拡大による語彙的意味と文法的意味の変化を対照している。ここで (1) 「an」が数量的範囲，時間，概念的抽象空間を表す場合，特定の格形態を取るという制約が見られる（例えば，「an-ey」は時間領域へ，「an-eyse」は抽象的意味領域への変化が目立つなど），(2) 「sok」は抽象的意味を表す用例が具体的空間を表す用例の2倍にのぼり「an」に比べて抽象化が進んでおり，「an」とは異なり時間や範囲の領域への意味拡大は見られず，連体節の就職を受ける「sok」は「ある字体や状態の持続」を表し，語彙的意味が希薄化している，(3) 「うち」は時間と範囲への意味拡大が目立ち，時間を表す「うち」は「an」のみならず不完全名詞「tongan」との対応も見られる，(4) 「なか」は具体空間という基本義を維持居ている段階では意味的自立性を保っているが，意味拡大による格形態の制限が見られ，「うち」「なか」に対応する朝鮮語が「an」「sok」だけでなく，自立性のより弱い「kauntay」「cung」と対応する，などといった点を明らかにしている。

【論文および最終試験の結果】

提出された論文に関し，審査委員会は以下の諸点を高く評価した。

(1) 従来の日朝対照研究では，言語データを収集する際に小説などの翻訳文献を用いることが少なくなかった。この手法はテクストが同一であるため対照しやすいという利点があるが，データの量が十分に確保されず限定的な分析になってしまうおそれがあった。それに対し，本研究では朝鮮語，日本語ともに厖大な言語コーパスを用い，各言語における内外空間名詞をまず丹念に観察している。これは，それぞれの分野が1つの独立した朝鮮

語内外空間名詞研究，日本語内外空間名詞研究として成り立つほどの充実した分析である。そして，それらの分析結果を基に日朝の内外空間名詞を細やかに対照することにより，最終的に非常に緻密な分析を実現している。

(2) 内外空間名詞の意味を分析するに当たり，当該内外空間名詞がいかなる格形態を取っているか，内外空間名詞に先行する要素がいかなるものであるか，後行する用言がいかなる種類であるかといった言語形式に着目して分析を行なっている。意味の分析は論者の主観的，恣意的な分析に陥りがちであるが，言語形式に立脚した形で意味の分析を行なうことで，より客観的な分析として仕上がっている。

(3) 本研究は現代朝鮮語と現代日本語の内外空間名詞に関する共時的，実証的な研究であるが，文法化という言語変化を視野に入れつつ，その変化の端緒を言語使用の共時的多様性と関連づけようとする試みがなされている。このことは，共時的な言語使用についての記述的な考察を，通時的な言語変化についての考察へと関連づけるものであり，共時的な研究と通時的な研究の接点を模索，実践する意欲的な試みであると言える。

(4) 内外空間名詞に関わる統辞論的な言語形式と意味の関係について詳細に記述し体系化を行なったことは，言語研究の分野のみならず，朝鮮語教育と日本語教育に少なからず資することが期待される。

このように評価される点がある一方で，以下のような課題も指摘された。

(1) 内外空間名詞に関連して先行する名詞の分類，および後行する動詞の分類をそれぞれ行なっているが，これらの分類の根拠が薄弱な部分がある。本論文の名詞分類は，名詞を「存在論的名詞分類」に基づきで実体性名詞と非実体性名詞に２分したのちに，「意味論的下位分類」に基づき細分化している。本論文で提示された名詞分類が既存の議論を踏まえているとはいえ，「存在論的名詞分類」と「意味論的下位分類」が両立しうる概念であるのか，十分に議論されていないように思われる。また，動詞分類に関しても，十分な定義がなされないまま分類がなされているものが散見され，更なる検討が必要である。

(2) 内部空間名詞（「an, sok」「うち，なか」）と外部空間名詞（「pakk, keth」「そと，おもて」）とで対照の枠組みが同一でない。本来ならば同一の枠組みをもって対照することで，内外空間名詞の対照の全体像がより体系的に描き出されると思われる。あるいは枠組みが同一でない部分にこそ，朝鮮語と日本語の対応関係の特徴的なずれが潜んでいるのかもしれないのに，そこを十分に描き出すことができずにいる可能性がある。

(3) 本論文は朝鮮語を軸に日本語を対照する形で分析が行われているが，どちらの言語が基軸となっているのか明瞭でないところが部分的にある。また，対照研究であるにもかかわらず外国語教育の観点が混在しており，論旨が揺れている部分が存在する。

最終試験の質疑応答において，金恩恵氏は質疑に対して的確に応答し，また論文の問題点を十分に認識しており，今後の研究にそれらを改善させる意欲を見せた。このような最終試験を経て，審査委員は上述の問題点を踏まえた上でなお，本論文が学術的に優れた論文であるということに意見が一致した。よって，審査委員会は全員一致で金恩恵氏に博士（学術）を授与することが適当であるという結論に至った。